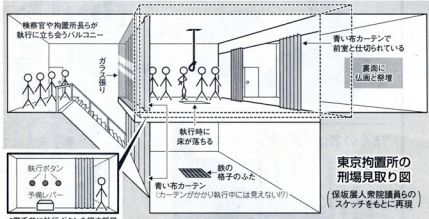


東京、大阪の両拘置所で7日、計3人の死刑を執行した法務省は初めて死刑囚の氏名を公表した。しかし、究極の公権力行使でありながら、死刑執行の実態はベールに包まれたままだ。「極端な秘密主義」と指摘される日本の死刑の実情と刑務官の心境を元幹部刑務官、藤田公彦氏(61)に聞いた。(片山夏子)

天井付近の赤ランプがつく。「押せ」。看守部長の声が響いた。壁に向かい横一列に並んだ刑務官五人が一斉に「死刑執行」のボタンを押す。藤田氏も夢中で右の親指に力を入れた。隣室から「フシュー」という空気が抜ける鋭い音。踏み板がはずれ、死刑囚が落下したのどろろと物音がした。その静けさが不気味だった。

# 「押せ」5人一斉執行ボタン

## 元刑務官が語る 死刑の現場



## 「職務…でも、なぜ自分が」

大阪拘置所の五つある執行ボタン(東京拘置所は三つ)は、ダイヤル設定で一つだけ執行に結びつく。当たり前。仕組まれたが、半年ほど前、刑務官五五人一人がボタンを押せず、それが「当たり前」だったため執行が手間取る。事件があり、ほかの刑務官に番が回ってきたのだ。執行されるのは27歳くらいの人。待機中噂が伝わってきた。「お褒めさせやればいいじゃないか」。複雑な思いがよぎる。

午前九時。管理部長に呼ばれ「死刑執行係を命じた」と正式に言い渡された。部屋では先と呼ばれたベテランが「これまで十人もやって、もう壊れてる年です。もう壊れて、落ちた死刑囚の体をけり止める。受け止め役」を命じられたのだ。見るものもかたがたが命令は断れない。「ボタンを押せないなら(刑務官を)やめなさい」と。嫌なのは同じ「老人の過去を」そり剥けた。仮釈放の時に身請け人を申し出た教団の妻子

## 「受け止め役」辞退許されず

を殺し金を奪ったと分かった。気持ちよき時であるが、執行の時までは長かった。刑務官仲間が黙って「時間」になると、ふたん使わぬ。西側廊下に五におきに刑務官が並ぶ中、死刑囚が刑場に連れて行かれる。途中、世話をしてくれた刑務官に「お世話になりました」。刑務官は、たまたま、泣きながら話をしていけば情も移る。頭張れよとも受けない。見ていてたまらなくなつて、執行のボタンのある部屋に逃げ込んだ。

死刑がどうやって行われているか知らされずにお金を罰されても、法律家でない国民は善えようがない。EJ、その他死刑廃止国が死傷たと指摘され続けているが、日本政府と最高裁は憲法三六条(拷問・残虐刑の禁止)違反ではないとの立場。堂々と執行場を国民に情報公開して被告を問えばよい。(随)

三層ほどのコンクリート打ち上げの壁際、刑務官五人から執行の部屋は見えない。執行の指をひたす待つ。息詰まらぬような空気が耐え難かった。

